留学生をサポートするボランティア活動をしている私は、ポーランドの留学生からアウシュビッツ強制収容所跡で起きた悲惨な出来事について聞いたことがあります。以前から行きたい思いを募らせていました。

今回、自分の目で「働けば自由になる」とドイツ語で書かれた正門のスローガンを確かめ、恐ろしさを感じました。激しい拷問が行われていたという処刑場では、あまりにも壮絶な内容の説明を聞いて、耳をふさぎたくなりました。

私と同年代の若者や罪のない人々が、ここで犠牲になったのかと想像すると、心が痛くなりました。こんな悲しい歴史を繰り返してはいけません。**人ごととして捉えるのではなく、継承していく必要があります。**

知識を蓄え、技術を発展させても、人間は一歩誤れば悲惨な出来事を起こし得るという危険性を持っています。戦時下と違い、今の私たちには、伝えるという自由があります。当たり前に思える平和が今後も続くよう、この悲劇を伝えていこうと心に決めました。

広島経済大４年　**大津 元貴さん(21)**

今回のスタディーツアーでは、さまざまなことを考えることができました。印象に残っているのは、アウシュビッツ強制収容所跡に展示されていた、赤ちゃんの服や靴といった遺品です。見ているうちに、一人一人の小さな命が、かすかに目に浮かんだような気がしました。なぜこのような命までもが、奪われなければならなかったのだろうか。思いを巡らすと、涙をこらえきれませんでした。

アンネ・フランクの隠れ家では、アンネと、恋心を寄せたペーターが、外の世界を眺めたという屋根裏部屋の窓をのぞきました。いつ外に出られるか分からない不安や、隠れ家が見つかることへの恐怖を押し殺しながら、この窓から自由と平和を夢見ていた少女の姿を想像しました。

ツアーを終え、偏見や差別がなく、子どもたちが自由に生きられる世界を実現したいと思うようになりました。過去の悲劇を伝え続け、一人一人が世界に対して責任ある行動をすることで、**子どもの笑顔が絶えない未来を築きたいです。**

広島市立大３年　**川田 亜美さん(20)**

アウシュビッツ強制収容所跡を見学するユダヤ人の姿を見て、複雑な思いを抱きました。彼らはどんな思いでこの風景を眺めているのだろう。歴史とどう向き合っているのだろう―。答えを探しながら、跡地を歩きました。

第２収容所のビルケナウは殺伐として、色がないかのような光景です。広大な敷地に、もし取り残されたら、雨が降り足場が悪くなったら、と想像しました。それでも犠牲者と全く同じ思いになり、同じ体験をすることはできません。いたたまれない気持ちになり、もどかしさが募りました。

アンネ・フランクの隠れ家を訪れ、職員の一言にハッとさせられました。「ここに来たことで、アンネの日記をパタンと閉じて、読み終わったように帰ってほしくない」。今回は、忘れかけていた戦争に対する恐怖や、**平和の大切さに気付く出発点だったのです。**私たち若者の秘める力は大きく、周囲に発信できるだけのエネルギーをもっています。成果をしっかりアピールしていこうと思います。

広島修道大３年　**田辺 美咲さん(20)**

現地での主な活動

（３月22～29日）

ポーランド・オシフィエンチム市

▽アウシュビッツ強制収容所跡（現アウシュビッツ・ビルケナウ国立博物館）見学
▽博物館の副館長と面会
▽館内にある「絵の展示室」を見学
▽収容所生還者の証言を聞く
▽現地の高校生・大学生と意見交換
▽ヤヌシュ・フビエルト市長に面会。平和首長会議会長の松井一実・広島市長からのメッセージを手渡す

オランダ・アムステルダム市

▽アンネ・フランクの隠れ家を利用した資料館「アンネ・フランク・ハウス」を見学。ロナルド・レオポルド館長と面会
▽資料館の職員やボランティアたちと意見交換
▽アムステルダム市役所を訪問。平和首長会議会長から市長宛てのメッセージを届ける

ホロコーストを学ぶスタディーツアー

平和のため私は動く

「広島と協力して、世界平和を進めていく責任がある」と話すフビエルト市長

広島と共に記憶受け継ぐ

オシフィエンチム市長

アウシュビッツ強制収容所のあったポーランド南部のオシフィエンチム市。ヤヌシュ・フビエルト市長は、原爆が投下された広島市と共に「戦争の悲劇のシンボルの町として、私たちは世界に平和を広げていく責務がある」と強調します。記憶を継承し、平和な世界を実現するには―。市長の思いを聞きました。（大津元貴）

―悲しい体験を繰り返さないためには、どうすれば良いですか。

70年前の出来事を示す実際の建物や場所を残すことが大事だ。一部に「ホロコーストは起きていなかった。うそだ」という意見もある。そうした間違った発言と闘うためにも、本物を残すことが大切だ。

日本もポーランドも終戦後、平和な暮らしが続いている。当たり前のような感覚になっているが、軍事衝突は今でも起こりうる。忘れてはならないのは、私たちには、正しくない人に権力が握られないようにする責任があるということだ。

さほど重要だと思われない普通の状態からプロセスが進むうち、戦争や悲劇が生じる。1930年代の映像を見ると、私たちと同じような人々がヒトラーやナチスを支持していた。日本でも最初は同じ状況だったはずだ。平和の維持は、私たち一人一人にかかっている。政治家だけではない。

―私たちは、平和のために何をすべきでしょうか。

社会やコミュニティー、家族の中で、一人一人が行動を起こすことだ。アフガニスタンやウクライナの情勢を見ても、70年前と同じような悲劇が繰り返されている時代に、私たちは生きている。肌の色や宗教、考え方が違っても、お互いを受け入れ、許し合う寛容な心を持つことが大切だ。毎日の生活でも、他人に親切にしたり、良いことをしたりすることで、世界平和につながる第一歩になる。

―広島とオシフィエンチムの若者が、協力してできることがありますか。

若者がここに滞在しながら強制収容所跡や平和推進機関を見学し、平和について考えるワークショップがある。私たちは一緒に協力して進めていくべきだと思う。未来を形作るうえで、若者がその基礎をつくっていかなければいけない。今続けている関係や活動が、将来役立つだろう。市長として、世界中から訪れる若者を歓迎し、支援したい。

本物に触れ 心で感じよう

アウシュビッツ国立博物館副館長

博物館のカツォジク副館長（左から４人目）から話を聞く大学生ら

アウシュビッツ強制収容所跡（現国立博物館）は、犠牲者の遺品や建物を当時のまま保存することを重要視しています。アンジェイ・カツォジク副館長に、歴史を継承する取り組みについて聞きました。

監視塔など約150の現存する建物と、ガス室など300以上の破壊・破損された建物は、ホロコーストの事実を示す証拠です。数十万に上る遺品は、一人一人の姿を物語ります。見学者は「本物」に触れることで、映画や本で知ったり、教室で学んだりするだけではできない経験を積めます。

人間がガイドすることも重要です。見学者が「これは何か」「どうしてか」と質問すれば、ガイドとの間に対話が生まれ、事実を深く掘り下げ、思いを巡らせることができます。テープを聴いて回るだけでは補えません。感情がコントロールできず、事実と向き合えなかったり興奮したりする人もいます。そんな時も手助けできます。

ポーランドの学校でアウシュビッツについて学ぶのは15歳からです。思春期に幅広い視点で人種差別を受け止めます。その後の人生で、自分で選択して実行する場面に直面した時、選択には責任が伴うことを歴史は教えてくれます。

「人間がどんな可能性を持っているかに気付き、自らをも警戒する必要を感じてほしい」。ユダヤ人というだけで殺された歴史がいつまた繰り返されるか分からない危険性を指摘。「アウシュビッツも広島も人類への重要な警告者でなければいけない。歴史の事実をデータとして蓄積するだけでなく、心で受け止めてもらえるよう伝えていくことが私たちの使命」と力を込めました。（川田亜美）

地獄に生きる 人間の力強さ

絵画展示室

肖像画や風景画、絵本…。アウシュビッツでも芸術が命と精神を支えました。収容者がナチス親衛隊（ＳＳ）に命令されて描いた絵や監視をかいくぐって真実を記録した絵の展示室を見学しました。

ＳＳに命じられて描くと、収容者はスープを多くもらえたり比較的楽な仕事を任せられたりして生きる可能性をつかめました。一方、実情の描写は禁止され、見つかれば重労働を強いられます。それでも、精神的に抵抗するため、描いた人がいました。

収容前後の自分を並べて描いたユダヤ人男性の絵が残っています。正装した自分が、収容者服姿の痩せこけた自分を指さし「これは誰だ？おまえか？私か？私だ」と記しています。「NICHT FREI（自由はない）」のメッセージは「働けば自由になる」とドイツ語で書かれた正門の標語を皮肉っています。

色鮮やかな絵本は連行後に生まれた息子のために、父親が作りました。脱走に失敗して殺されたため、息子を見ることはかないませんでした。しかし「息子よ、人生の中で一番大切なのは勇気だよ」と書き残した絵本は戦後、息子の元に届けられました。悲壮感の漂うガス室とは違い、地獄のような生活の中でも生きようとした人間の力強さと明るさを感じました。

（時盛郁子、土江友里子）